3月11日 東日本大震災

被災地からのメッセージ

「真摯に向き合うこと」から

千葉県安房郡 森永歯科医院 森永宏喜（48）

東北大学が母校の私は、かの地に多くの親類縁者、友人がいる。今回の震災で私自身は被災者ではないが、当事者と直接の関係を持つ位置にいることになる。

震災発生直後、物流が寸断され宅急便の再開前の段階で日用品の緊急要請に応えての物資調達、大学同窓会を通じた災害救護班への治療機材の支援などを行ってきた。震災から１カ月以上過ぎて初めて現地に入ったが、瓦礫の山を目の当たりにした衝撃は今も色褪せることはない。現在は中長期的な経済の復興に少しでも役立てるよう、被災地の農産物生産者を中央のニーズと結びつけたりと多方面で動いている。

石巻・北上河畔にポツンと残された石ノ森萬画館。

石巻市街。漁具と車の残骸が同居する。

被災地と種々の連絡を取り合う中で印象的な話がいくつかあるが、今回は以下のエピソードをご紹介したい。

石巻の開業医Ｋ君は私の同期生。学生時代にははるばる南房総の私の実家まで遊びに来てくれた親しい友である。仙台の友人からの情報では、診療所が被災し大きな痛手を受けながら地域住民のために災害救護にあたっているということだった。

その話を聞いて慰めの言葉も見つからず連絡をためらっていたが、５月初旬、当院スタッフが医療救護班に参加のため仙台入りするにあたり、石巻・女川の情報をもらうために電話を入れることにした。

「おお森永、電話ありがとう！」

人懐こい声のトーンは学生時代と変わらない。医院の被害状況、地域の医療体制の話題などの後、「津波、どうだった？」と少し遠慮がちに訊いた私に

「……恐ろしかったよ」

と彼は語り始めた。

いつものように午後の診療を開始していた彼の医院を激しい揺れが襲った時、彼はすぐに「避難する」という選択をした。居合わせた患者さん、そして医院のスタッフを連れて、高台になっている近くの日和山公園に徒歩で向かったという。

「もし車で逃げる、という選択をしていたらどうなっていたか判らない」

その時すでに道路は避難する車で渋滞が発生していたということだった。

「皆で登っていく途中で、第一波が来たんだよ。水に囲まれたら車のドア、開かないからな」

報道によれば、石巻への津波の第一波到達は地震後約35分。市街が濁流に呑まれていく様を、ただ呆然と眺めているしかなかったという。

安全が確認された後、彼は患者さんを避難所に送り届け、スタッフも帰宅可能な者は帰したが、無事だった彼の自宅に３日ほど泊めた者もいたという。最後は水が引かず、自衛隊のボートに救援を仰いだとのことだ。

彼の医院があった地区は一番被害がひどい所で、現在、市当局から「災害地区」に指定され建物の建築などに制限が設けられているらしい。彼は市内の他の場所での診療再開を目指しているが、

「建築業者が来てくれたけど、資材が入らないらしい。早くて（再開は）夏かな」

と淡々と語っていた。

彼にとって、漸く訪れていたみちのくの春は３月11日で止まったままである。

女川・海岸線近くから小高い丘まで打ちあげられた電車。

女川・人命は守られても、雇用の確保がなければ地域の再生はない。

後日談；

この文章を書いてWebに載せたのが５月初旬。先日Ｋ君に連絡を取ったところ、仮設住宅優先だった建築資材も調達が進み、７月末には移転先での診療を再開できる見通しとなったとのこと。

感覚的には「石巻の瓦礫の撤去はまだ半分程度」とのことだが、２ヵ月ぶりに状況を聞き着実に復興に向かっている印象を受けた。なにより彼の言葉の端々に「前向きなエネルギー」を感じたことが収穫と思う。

これから東北のために何が出来るのか、勢いだけではない継続的な、本当の創意工夫が私たちに求められている。人知を超えた未曾有の災害を克服するのはもちろん容易なことではない。しかし自らがこの国難にどう対峙していくのか、国の未来にどんな形で責任を示すのか、私たちそれぞれが回答を持つべきだろう。

大言壮語をする必要はない。自分の出来ることをすればいい。「真摯に向き合う」ことを止めなければ良いと思うのだ。

女川・避難所となっていたお寺での歯科救護診療。義歯修理。

被災地の歯科医療を守るためのご支援をお願いします

コムネットでは、被災地で復興を目指す会員さまを支援しています。現地の状況が日々変わっているので、随時「スタッフブログ」にてお声がけと活動報告をしています。皆様のご協力、ご支援をお願い申し上げます。